明治四十年刊《日臺大辭典》原序

日臺大辭典序

昔者豐公の朝鮮を伐つや曰はく當に彼をして我が言辭を用ゐしむべし曷んぞ譯人を以てせんと英雄大局の見庶幾はくは之を事功の兼ぬる所に驗すべし若方言の異文獻の徵に至りては設ひ車書混同の餘に在りても亦博雅の必之を存繹せんと欲する所なり況や臺灣の如き既に我が幷幪に入り治理日〻に張るの時に於けるをや是臺灣總督府が夙に譯言辭書編輯の事を企てたりし所以にして十年の久しき幾たびか其稿を易へ終に日臺大辭典萬數千言を纂彙することを得たるは實に小川編修官以下前後當事者の勞に待てり

由來本邦の文學史は辭書纂修の一事に於て大に文明諸國の撰に遜し往古淨見原の新字書は闕けて傳はらず和名抄三才圖會以下名數事物槩支那舊纂の依倣に止まり近時邦語諸辭典人名辭書歐和對譯等數種較〻觀るべきものを除くの外國文特創の辭書を擧ぐれば僅に和學者流古言の書若くは伊呂波節用の類あるのみ反之臺灣の如きは支那傳來文學の淵源あり支那は實に辭書叢書の發達に於ける世界先進の文學國にして爾雅說文玉篇以來諸種百科の辭書も殆ど備具せずといふことなし我が臺灣の言文其根柢の深固なること斯の如し由是觀之臺灣化育の方は之を言語文字の上より見るに於ても亦當に宜しく核ふべきの本末なくんばあるべからざるなり如之何混同を縱談して妄に豐公を引くことを得べけんや

當今本邦言文の異大別五方曰はく日本曰く蝦夷曰はく琉球曰はく臺灣曰はく臺灣諸蕃且や彼の滿洲朝鮮の如きも國家勢力の注ぐ所其譯音飜義の要攷古徵今の需日〻に將に益〻切ならんとす若日本國語の一門は姑く之を舍かんにも從來彼の四隣異言の采覽に於て果して能く一完好辭書の擧ぐべきものありしか以予觀之日臺大辭典の編成の如きは啻に以て聖朝文運覃敷の盛を徵すべきのみに非ず蓋或は許すに當今本邦方言辭書中の錚錚者を以てすべからんものなり自今而後援稽の人博涉會裒して廢くことなくんば他日惡んか其完好無缺の善本たらざることを知らんや

明治三十九年四月二十五日

臺灣總督府民政長官　男爵　後藤新平　撰す